悩み・苦痛の逆療法
第１部 解脱の真理の発見

（26）感情の世界のものは美しくないか

カントは「自分の内にある道徳律は、夜空に輝く星と同じく美しい」と言った。そして、道徳律とは、性向で行うのではなく、義務感により行うものであると言った。性向とは、性質とか、情緒とかであり感情の世界のものであり、前述の本能の脳に起因するものも多いのである。一方、義務感とは「・・・・・をしなくてはならない」とか、「・・・・・してはならない」という理性の世界のものである。

そうすると、感情の世界の性向に起因する行動は美しくないのであろうか。確かに、感情の世界に生まれる怒り・憎しみ・妬み・嫉妬等の感情に起因した行為は美しいどころか醜いものとか嫌悪をもよおすものとかがかなりある。しかし、感情の世界に生まれる相・慈しみ・思いやり・同情・不憫・優しさ等に起因する行動は美しくないのだろうか。

カントは、このような性向に基づいた善行については、何も言っていない。しかし、彼が義務感に基づいた道徳律を「思えば思うほど美しい」と褒めちぎるところから推量すれば、性向に基づく善行をそれほど美しいと思っていないのであろう。

確かに、「『性向としてはやりたくないのだが、やらなければならないのだから行う』ということは、大きな心の抵抗を押し切って行うのであるから、崇高な道徳である」と、私も考える。その点において、性向、例えば心根の優しい性質に基づいてホームレスに物を恵むことはその人の心の抵抗感がないか、薄いのであるから容易に行えるであろう。従って、前者の例に比べて道徳的ではないといえる。

しかし、例えば、心の優しい人が自ら貧しくひもじいにもかかわらず、ホームレスに物を与えた場合、優しい性向ゆえに、心の抵抗感がないという場合はどうであろうか。

抵抗感がないのであるから、カントの道徳律から見て、この行為は道徳的ではない。それでは、視点を変えて見た場合、この行為は美しくないであろうか。美しいか否かは、人の心を感動させるか否かである。厳しい道徳律に基づいて抵抗感を覚えながら義務感を持

って善行を行うことも感動を与える。

　しかし他方、この優しい性向のために抵抗感もなく、自己犠牲を伴いながら善行を行うこともやはり人に感動を与えるものである。従って、感情の世界に起因する行為には醜悪なものも多いが、人に感動を与える美しい行為は、相当に存在するのである。

　これを短歌にまとめると、次の通りになる。

道徳律　星の如くに　輝けど
情の池にも　蓮の花咲く